

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(69) 平成15年5月1日

新井白石シリーズ

新井白石の『折たく柴の記』(Q914-4)

新井白石(明暦3(1657)年~享保10(1715)年)は、江戸時代の儒学者で、歴史家でもあり、「正徳の治」をおこなった政治家です。その新井白石が記した自叙伝が、この『折たく柴の記』です。『折たく柴の記』の序文には、白石自身を含め新井家の祖先の事績を、子孫に知らせ伝えるために記したと執筆意図が記されています。また「外様の人の見るべきものにもあらねば」と記されており、非公開の自叙伝とすることができます。このため、『折たく柴の記』は白石没後でもごく一部のの人に読まれるにすぎませんでした。しかし理由や経過は不明ですが、次第に伝写されるようになり、明治以前に多くの写本が存在し、広く読まれるようになりました。新井家には白石直筆の清書本が所蔵されています。清書本は、縦29cm、横22cmの袋綴じで、上巻(56枚)・中巻(71枚)・下巻(74枚)の三巻から成ります。なお、当館所蔵久能文庫資料は、写本で上巻(70枚)・中巻(80枚)・下巻(94枚)の三巻からなり、成立年は不明です。資料の大きさは縦22.2cm、横15.5cmで、この時期に記された多くの写本の1つとおもわれます。

『折たく柴の記』は、序文に「丙午(享保元(1716)年)の10月4日に筆を起こしつ」とあります。この年は7代将軍家継が没し、紀伊藩主吉宗が8代将軍についた年であり、白石が政治の中枢から退けられた時から著述が始められています。また末尾に「正徳6(1716)丙申5月下澣筆を断つ」と記されており、この時点までの記事・論説で終了すると明言しています。

記述内容に関しては、上巻では主に白石の祖父母や両親についての記述、白石の生い立ちと甲府藩出仕時代までの白石自身の事柄について記しています。中巻・下巻では、白石自身に関する事項の記述もありますが、全体としては将軍家並びに幕府の政治が中心であり、6代将軍家宣・7代将軍家継時代の政治上の業績に如何に関係してきたか、という点を中心にして記述しています。「正徳の治」という白石の幕政改革は、高校の日本史で学ぶ基本的な事項ですが、なかでも有名な「長崎互市新例(輸入を制限して金銀の海外流出を防ごうとするもの)」は中巻に、金の含有量を減らした元禄時代の悪鋳銭を純良な慶長金銀に戻そうとした貨幣改鋳に関しては、下巻に記されています。

また、白石が経験した災害に関するも幾つかの記載があります。「癸未の歳、11月22日の夜過るほどに、地おびただしく震ひ始て…」と、元禄16(1703)年11月の南関東大地震に関する白石が見た地震の被害記事がその1つです。さらに、宝永4(1707)年の富士山の大噴火の記事もあり、白石の目から見た噴火の姿や降りしきる火山灰による被害が次のように記されています。「地震ひ、此日の午時(昼12時頃)雷の声す。家を出るに及びて、雪のふり下るがごとくなるをよく見るに、白灰の下れる也。

西南の方を望むに、黒き雲起りて、雷の光しきりにす。…白灰地を埋みて、…灰また下る事甚し。…「此日富士山に火出て焼ぬるによれり」といふ事は聞こえたりき。」とあります。

なお、この噴火により、宝永山ができました。

【参考文献】

『折たく柴の記』(080/113)(岩波文庫・黄212-1)

『新井白石の研究』(289.1/77-2)